

新型コロナウイルス こう考える



なおの・あきこ 1972年生まれ、兵庫県出身。専門は社会学。米カリフォルニア大で博士号。九州大、広島市立大を経て今春から現職。主著に「原爆体験と戦後日本」「被ばくと補償」など。

「オールジャパンで乗り切ろう」という掛け声を耳にするが、社会が緊急事態下にあるとしても、皆が同じ危機を生きているわけではない。感染拡大防止対策が必要不可欠であることに異論はない。

しかし、社会全体を対象にした公衆衛生策とわずかな経済対策だけでは、コロナ禍以前からぎりぎりのところで生きていた人々を、関連死へと遺棄することになるのではないだろうか。経済的困窮に起因する自死だけでなく、社会的つながりを断ち切られたことによる緩慢な死へともある。

「ステイホームは自身と大切な人を守る行為だと言われるが、軟禁状態の長期化によって精神は蝕まれていく。家庭が危険な場である人にとってはなおさらだ。息を殺し、身を縮めながらの生活に、心身ともに追い詰められている。「社会的距離」を保つようにという要請も、不便だと愚痴を言っただけならよいが、家族以外の他者と接することで命を支えられている人にとっては死活問題だ。家庭内暴力を受ける女性や虐待される子ども、ホームレ

京都大人文学研究所准教授 直野章子

新たな社会 他者の苦しみに想像力を

ス、障害者や高齢者らにとつては、地域や民間の支援団体が命綱となってきた。必要な公的支援が乏しい中で支援者たちは奮闘してきたが、感染拡大後、多くの団体が活動を停止もしくは大幅に縮小せざるを得なくなっている。

「命を守るための指針は、支援を必要とする人の最後の砦を奪ってしまうことにもなりかねないのだ。対面を避けつつも支援を継続するために、オンラインや電話相談が既に始まっている。だが、支援活動はリモートワークのようにはいかない。

オンライン媒体を通しては、表情を読むことも視線を交わすこともできず、そこにある苦しみを感知するのが極めて難しい。苦しむ存在に気付くには、場を共有することが求められるからだ。そもそも、助けが必要な人が機器にアクセスできるとは限らないし、できたとしても、自発的に支援を求めるのはハ

ードルが高い。助けを求める余力さえ残っていない人には、声を掛けてもらうことが生と死の分かれ目となることもあるのだ。

窒息しそうな閉塞感と不安に、私たちの心はささくれ立っている。しかし、「社会的距離」を他者の苦しみに背を向ける自己防衛の壁にしてはならない。

子どもが公園で遊んでいる姿にいら立って学校に苦情の電話をかける前に、公園がその子にとって唯一の逃げ場となっているかもしれないと想像力を少しだけ働かせてみてはどうだろうか。

家庭が安全な場ではない子にとつて、家の外へのアクセスが閉ざされることは、安心できる場とSOSのサインを受け止めてくれる人を失うことを意味するかもしれないのだから。

「助けて」と声を上げることはとすらいけないかもしれない存在に目を凝らし、コロナ禍以前から誰がどんな苦しみや不安の中に置かれてきたのかを想像してみよう。

そして以前とは違う社会を創っていく。死の方へと追い詰められる人を一人でも減らすために。